共創　Vol. 1 pp. 66～70, March, 2023

実践研究ノート

休日保育参加における運動遊びの実践
－子ども・保護者・学生・教員の交流に着目して－

鈴木 一成*　西垣 祥子**

*保健体育講座
**附属幼稚園

Physical Play Activities in Holiday Kindergarten Events
– Interactions between Children, Parents, Students and Teachers –

Kazunari SUZUKI* and Shoko NISHIGAKI**

*Department of Health and Physical Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Kindergarten Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya 461-0047, Japan

Keywords：運動遊び　交流

Ⅰ　はじめに

本研究で提示する実践は、休日保育参加における運動遊びである。これは、愛知教育大学附属幼稚園（以下、附幼とする）の行事の１つであり、2022年５月21日の土曜日の午前に実施したものである。2018年と2019年と実践を継続しており、今回で３回目となる。本実践は、附幼の教育活動の充実及び保護者理解を深めることにとどまらず、参加学生が子どもや保護者の方々、幼稚園教諭の指導に直に触れ、将来の自らの教師像をより明確にすることや、教職への魅力そして教職の実践的な指導力の重要性を肌で感じ取る機会とすることができると考える。また、本実践は、大学と附属学校の互いの人的資源の交流は、教員養成及び教員研修のさらなる充実を図るための貴重な実践となり、本学が目指す「愛知教育大学は、子どもと共に、学生と共に、社会と共に、附属学校園と共に、未来の教育を創ります」[1)]というビジョンを具体化する事例となると考える。

そこで、本研究では、休日保育参加における運動遊びの実践での様子を提示するとともに、映像や画像及びフィールドノーツから、

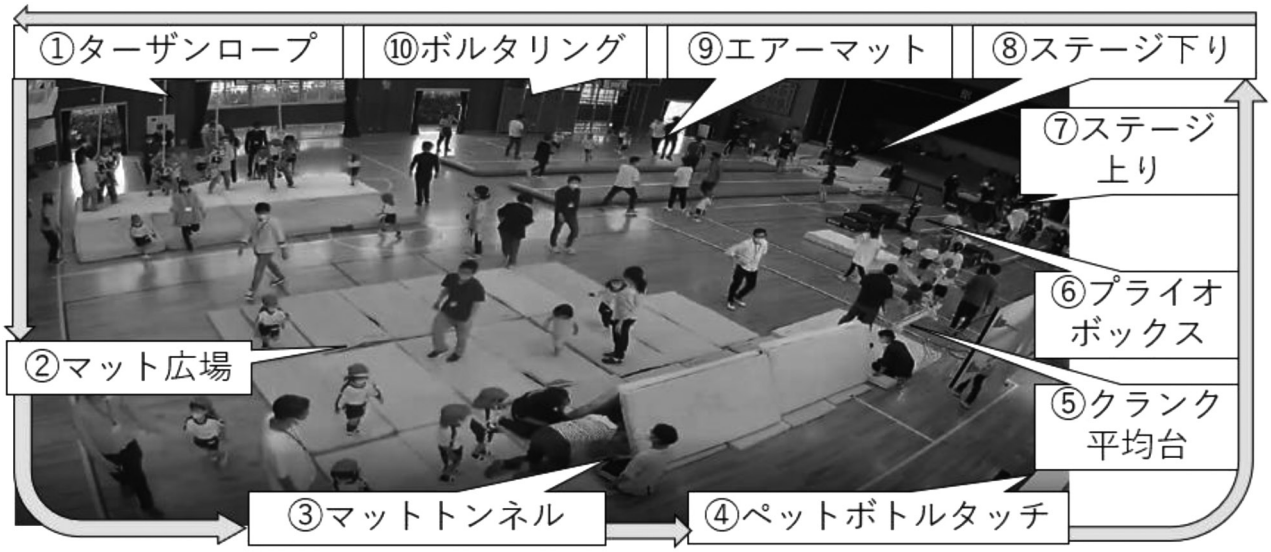

図１　休日保育参加における運動遊びの全体

活動の様子を実践事例として抽出し、学生、保護者、教員の感想（アンケートの自由記述を含む）を参考にして、本実践の理解を深めるための解釈を試みたい。

Ⅱ　実践の様子

1　実践の概要

図１は、実践における10の遊び場である。年少、年中、年長の３グループが、20～30分程度で行った。親子ペアで①から⑩の順でどこから開始してもよいこととした。

学生は各場の安全に留意するとともに子どもの遊びを支援することに努めた。実践後、学生には「本実践で学んだこと」と題した感想文を電子媒体にて提出するようにした。また、保護者には「ご意見やご感想をお聞かせください」と記したアンケートを依頼した。さらに、附幼教員の実践の振り返りも回収した。いずれも自由記述とした。

2　実践と検討

⑴　親子ダンスでウォームアップ

どの実践においても導入は大切である。いわゆる屈伸や伸脚といった準備体操やラジオ体操ではなく、本実践のトップバッターは親子ダンスでウォームアップをねらった。附属教員の振り返りにも「親子体操も始まりにあってよかった」「年少組だけ体操がなかった。触れ合い遊びのような体操があっても良かったが、年中長と同じようには難しい」とあった。親子でのおんぶ（**写真１**）や親子での手軽な表現リズム遊び（**写真２**）への取り組みは必要であったと考える。

写真１

写真２

⑵　ターザンロープ

ターザンロープでは、ロープにつかまって遊ぶ様子（**写真３**）があった。また、親子で

写真３

写真４

ブランコのように揺れる様子（**写真４**）や、ロープへ上がるところまで手伝ってもらい、親に背中を押してもらって大きく揺れて遊ぶ様子があった。いずれも全身の締め感覚や腕支持懸垂が培われる遊びといえる。

保護者のアンケートには「体育館では大学の先生や学生さん企画の運動をさせて頂きましたが、子どもはロープにぶら下がる運動が楽しかったのか、家でもしばらく『あのね、ぶら下がるやつ、できたんだよ』と言っておりました」「ロープのターザンがお気に入りで、高い所からジャンプをしたり、普段できない遊びを親子で楽しませていただきました。安全に配慮しながら、あれだけ大きな、子どもがワクワクするような環境をつくっていただき、貴重な体験ができました」「日頃はあまり体を動かして遊ぶ機会がなかったので、最初は子どもも慣れていないようでしたが、２周目を過ぎると楽しくなってきたようで、手をつながなくても動いてくれて、楽しんでいる様子がみられました。ロープにつかまって遊ぶことが少し怖かったようですが、親にサポートしてもらえたのが嬉しかったと申しておりました。大学生のお兄さん、お姉さん、先生方と一緒に遊べたのが何よりも楽しかったようです。親子で久しぶりに一緒に汗を流す運動ができてよかったです。」という記述があった。これらの記述からはターザンロープでの遊び場が肯定的に受け入れられていたと考える。

その一方で、「体育館のターザンロープについては、長さのために思ったよりも操作が難しく、諸注意の中で触れていただくとより

安心して楽しめたと思いました（左右の衝突、通り抜ける子どもへの待機等）」という記述があった。附幼教員のアンケートにも「ロープ遊びの場での安全確保。人がいるのであれば、いろいろな場で遊びを見守ってもらえると良かった」「今回やってみて、流れと動きの予測がついたので、次回以降動線の整理や人員配置など、事前に打ち合わせができると思うので、生かしたい。」とあり、安全面での課題とその改善策も出された。

⑶　マット広場とマットトンネル

この場では親子で手をつないで横転がりで遊ぶ様子（**写真５**）があった。マットの下に空気を抜いたボールが設置して凸凹での転がりを楽しむ様子があった。

写真５

しかし、２周目以降は子どもも保護者も飽きてしまった様子であり、マット広場での遊びには人気がなくなってしまった様子であった。そこで、学生と筆者が即興的で設営したのがマットトンネルであった（**写真６**）。隠れ家的で少し暗い雰囲気もあり、親子で一緒に入ったり、出口に学生が手招きしたりした工夫により、人気の遊び場になった。ゴールした瞬間には学生とタッチをする姿もあった（**写真７**）。子どもも学生もとてもうれしそうな表情であった。

写真６

写真７

保護者のアンケートには「体育館では、大学生の方が名札を見て『○○ちゃん』と呼んでくれたり、ハイタッチをしたり、一緒にノリノリでジャンプしてくれて、本人すごく楽しそうでした。たくさん体を動かして満足したのか、夜は19時頃にはコテッと寝てしまいました。来年も楽しみにしています。」とあった。

学生の感想には「授業中はマットのトンネルにいました。最初は、ただ四つ這いでトンネルをくぐる子ばかりでした。しかし、学生が後ろ向き、ブリッジ、匍匐前進などいろいろな方法でくぐると、子どもたちも真似をしていろいろな方法でくぐっていました。子どもたちの柔軟性を活かしたポーズでチャレンジしている子たちもいました。型にはめないでいろいろ方法を試して大丈夫だよと言葉だけでなく行動で伝えることも大切だなと思いました。」とあった。

これらの記述からマットトンネルでの遊びを学生の試行錯誤が支えることになっていたと考える。その支え方は「言葉」よりもむしろ「一緒に遊ぶこと」にあったということを示唆するものであり、実践フィールドでなければ学べない貴重な機会となったと考える。

⑷　ペットボトルタッチ

ペットボトルタッチは、附属名古屋小学校体育部（以下、体育部教員）の協力で実現した場であった。前日の準備段階ではこの場は予定になかったが、当日、参加者数の動きをみて、当日参加の体育部教員の協力で、数日後に控えた春の公開授業で使用する教具を使用できた。子どもがタッチに挑戦する傍らで応援する保護者の様子（**写真８・９**）、協力プレイする様子（**写真10**）が見られた。ペットボトルを注視しつつ、屈伸した姿勢から一気に伸びあがるとともに上方へ跳ぶ動きを培う動きも確認することができた。

写真８

写真９

写真10

⑸　クランク平均台

当初は、３台の平均台を１台ずつ平行にして設置していた。「クランクにした方が面白くなりそう」という保護者の意見を採用してクランクのコースに変更した（**写真11**）。

写真11

附幼教員の振り返りには「子どもの楽しんでいることを受け止めながら場を作り変えてくれてよかった」とあった。先のマットトンネル同様、まさに臨機応変での遊び場の設定及び再設定そのものが、実践力育成の視点になると考える。

⑹　プライオボックスとステージ上り

この場では、プライオボックスから下りて遊ぶ様子（**写真12**）があった。

写真12

また、ステージへ上る場では、懸命に上る姿（**写真13**）があった。学生は安全面に留意するとともに、子どもの挑戦意欲を支えるように全身で応援する姿があった。手を貸してしまうことをできるだけ慎み、子どもが全身を使って這い上がろうとする動きに、学生は精一杯応援している姿が見られた。保護者のアンケートには「体育館でのマット運動を通して、私が思うよりもずっとしっかりした子に育っていると思いました。特に、自分よりも高い段差のマットにも積極的に挑戦している姿に成長を感じました。」という記述があった。子どもの挑戦を支えることは、単にできたという結果を求めるだけではなく、できないことへの向き合い方とそこで得られる探究する面白さがあることへ気付く機会もあると考える。

写真13

学生の振り返りには「私は主にステージに登る子どもたちを観察した。そこでは多くの発見があった。例えば、子どもの中でもジャンプして登れる子、膝をつきながら登る子、手や顔を使いながら登る子などさまざまな動きを観察できた。このステージに登るという行為は跳び箱に通ずるものがたくさんあると感じた。手を使いながら箱に乗る、越える、跨ぐなどという動きは跳び箱の動きそのものであると感じた。」とあった。具体的な動きから運動を観察する力を培う機会になったといえる。

⑺　ステージ下り

ステージから下りる遊び場では、補助学生が子どもの回転で下りる動きを適宜支援する様子もあった（**写真14**）。

写真14

保護者のアンケートには「体育館では一生懸命高い台に走って飛び乗ろうとする姿や、大学生のお兄さんお姉さんから（優しく）ころりん（でんぐり返し）の方法を教えてもらい」とあり、続けて「一緒に取り組む中で子どもの成長を感じることができたことを、何より嬉しく思いました」とあった。その学生の振り返りには「自分のポジションとしては台を上がってから降りるときのでんぐり返しゾーンを担当していました。はじめは先生に『横に落ちそうな子がいるから補助してあげて』と言われて実行していましたが途中からは回転の補助や盛り上げ役、逆走防止の役割をしていました。安全面に配慮することが第一だと思いましたが途中から『回転してみようか』『ココに頭ついてみて』というように回転することを促すようになっていました。一番驚いたことはほぼすべての子が『前の人の状況を確認してから跳ぶ』という動作を身に着け

ていたことです。危機回避については幼稚園の先生方が努力して指導されたのだと幼児を見て理解できました。」とあった。こうした学生と子ども、保護者の交流があった一方で、保護者アンケートには「学生も多数いただけで漠然とした感じでした。何もなかったので良かったですが何かあった際の責任体制に不安を感じました。」「体育館でたくさんの学生さんがいらしていたようですが娘に学生さんが一緒に遊ばず立っていたり写真をとっているだけとかなり不満そうでした」という記述もあった。教員アンケートに「（保護者の感想）人が多く、学生が子どもをみてくれて、教えてもらえるものだと思っていた。…休日保育参加で親子参加の意味合いだったので、学生の在り方をはっきりさせたほうがよかった。」とあった。今後の改善点としたい。

⑻　エアーマットとボルタリング

エアーマットマットの遊び場では、子どもと学生の競走の様子があった（**写真15**）。また、ボルタリングの遊び場では、子どもと保護者が一緒に上り下りする様子があった（**写真16**）。これらの場においても運動の交流があったといえる。

写真15

写真16

Ⅲ　おわりに

保護者アンケートには「祖母が参加しました。大学から来られた先生方の力強さにも感心し、大学との交流がある附属幼稚園の魅力を多いに感じたとのことです。」「研究として動画や静止画を使用されるということですが、研究内容や結果など興味があります。どこかで拝見できるようだと嬉しいです。」「愛教大の先生や生徒の皆さんと過ごした体育館は本当にすばらしく、参加して良かったと思いました。子ども達の動きなどを見て、どのように感じたのかも感想を聞いてみたいなと思いました」という記述があった。活動前後に場の設定意図や動きの所見を大学教員から発信する機会も含めて、今後の課題としたい。また、研究内容や結果の情報提供に関しては、本論文もその一助になればと考える。なお、本実践は、参加学生が受講する2022年度後期大学授業「教職実践演習」にて、改めて各自が省察する貴重な経験として位置付け、教員養成に資する内容を検討していく。そして、魅力ある附属幼稚園と大学の交流のあり方を引き続き模索していきたい。

引用参考文献

１）愛知教育大学、未来共創プラン
https://www.aichi-edu.ac.jp/intro/outline/miraikyousou.html#p03（2022.8.18 閲覧）